



近代東西人間観の衝突と相克化

Clash of East-West Views of Humanity

目次

1. 人間観の衝突－東西交流以前の問題点
2. 東西洋交流と変化の契機
3. 共通起源: 三機能体系と天観・地観・人間観
4. 天人・地人関係の相克化過程
5. 西洋と東洋の天人関係比較
6. 結論および意義

人間観の衝突交流以前の問題点

東西洋は交流以前にも人間観が独自の発展したが、それぞれ限界と問題を内包していた。

- 西洋地水火風の第五元素が唯一神化することにより神明体系が消滅→人間は唯一神の前で罪人へと転落し、悔悛と救済
- のみが唯一の道 東洋相關的思惟が硬直することにより両班と常民の差別が深化→社会的階層構造の硬直化
- 悪貨が良貨を駆逐するという経済学法規則のごとく、東西洋交流時に人間観の短所がより際立つことになる

東西洋交流と変化の契機

近代期に東西洋が本格的に交流することにより、各思想体系の限界と変化の契機が用意される。

- 西洋マテオ・リッチを通じて超越的神なしでも可能な倫理的社會を発見 → 超越志向から内在志向へと
- 転換 世界観の変化神の位置を物質が代替し人間中心の世界観が強化
- 衝突の深化帝国主義期から天(天)が内在神から超越神へと変化 → 地と東洋は征服対象として認識東西洋交
- 流は自生的近代性の人間観を形成する契機となる

共通起源三機能体系と天観・地観・人間観

東西洋人間観は表面的な差異にもかかわらず、古代に遡れば共通の起源を持つ。

- 三機能体系(trifunctionalism):印欧広域にわたる社会組織原理構成:宗教階級(バラモン)-戦士階級(クシャトリア)-生産階級(バイシャ・シュードラ)
- 共通事例:仏教の二十八天、道教の三十六天の天観、ギリシア・ローマ神話のトロイア戦争

西洋の特徴

- 時間的垂直構造の強調
- 創造主の持続的干渉
- 個人の業と輪廻の重視

東洋の特徴

- 空間的水平配置の強調
- 「隠れた神」としての創造主
- 祖先と子孫の勝負(勝負)の重視

天人・地人関係の相克化過程

交流と近代の衝撃により天人・地人関係が精緻化されると同時に相克化する様相が現れる。

- 東洋陰陽五行の世界観において人格的天人関係が理法的天人関係へと変化→三界(天界、地界、人界)の分離と神明体系の弱体化
- 西洋第五元素が超越神へと格上げされ内在的属性を喪失→地と人間は単純な支配および操作対象へと転落

相生的であった天人・地人関係が相克化することにより人間界を通じた天上界の発展が中断→天地の化育の中断、宇宙の混乱の加速

西洋と東洋の天人関係比較

東西洋の天人関係は人間と神(天)の関係設定において明確な差異を示す。

西洋の天人関係

- 超越的**唯一神**森羅万象を主宰する**絶対者**であり、法則なしに任意にすべてを決定
- **権威的構造**人間は神の前で罪人であり、神の命令への服従が最高の価値
- 天使の役割**唯一神**の事を特別な場合にのみ遂行、特定領域別の固有業務なし
- **進化様相**近代以後、超越的権威が弱体化し物質が神の位置を代替

東洋の天人関係

- 内在天観上帝は法則(理法)に従い主宰する隠れた神 (Deus absconditus)の属性
- **相生的関係**天命(天命)と徳(徳)を中心とした調和的關係を志向
- **神明体系**自然を運行する多様な神明が存在し、各領域別に分化された構造
- **進化様相**時空間的三才観(天地人)が強調され、祖先-子孫間の勝負(勝負)を重視

結論および意義

東西洋人間観の衝突と相剋化は各文明の近代性形成とアイデンティティに大きな影響を及ぼした。

- 歴史的意義東西洋交流はそれぞれの限界を克服する契機であり、同時に短所が拡大する過程であった
- 天人関係西洋の超越神観と東洋の内在神観が衝突し相剋化したが、同時に再定立の機会を提供地人関係西洋の地に対する支配・征服の観点と東洋の相生的観点が相剋化し、現代の環境問題の起源となる

近代性のリミナリティ様相として、聖俗の再配置が天人・地人関係において要請され、これは現代的人間観の探究と文明間の対話に重要な示唆点を提供する。